



昔の暮らしと今の暮らし

戦後の日本経済はめざましい発展をとげてきましたがその間、私たちの暮らしの内容も、テレビや電気製品が普及したり、レジャーを楽しんだりというように大きな変化を見せてきました。終戦直後の混乱期にくらべれば、現在の私たちの暮らしは、はるかに向上し、安定しているといえます、しかし、戦前の暮らしにくらべると、現在の暮らしは、はたして良くなっているのか、疑問のめたれる方もあるかもしれません。そこでこの点について戦前と現在の家計調査の結果から調べてみることにしましょう。

収入、戦前の54%高

戦前の昭和10年では、勤労者世帯の手取り収入は1か月91円31銭でしたが、戦後の昭和40年では、これが62,340円となつています。しかし、この間に物価も443倍上昇していますから、これを調整すると、戦後の昭和40年の家計は、戦前にくらべて、収入では、実質的に、54.0%増加し、また、生活費は49.8%増加したことになります。さらにこの生活費の伸びのうちわけをみますと、物価を調整した実質で、食料費は22.8%、住居費は81.2%、光熱費は128.8%、被服費は32.3%と、雑費は78.5%の増加となつています。これは、電球とラジオくらいしかなかつた戦前の暮らしから、家庭電化ブームといわれるように、住居費中で電気機器やまた、暖房器具が増え、それにともなつて、電気代やガス代などの光熱費が大幅にのび、また、教育費や教養娯楽関係の雑費が増大していることを反映しています。

食生活の高級化

ところで、生活費なかでしめる食料費の割合はエンゲル係数といつて、生活水準の高さをしめすものといわれていますが、戦前の昭和10年には、35.9%で、昭和40年の36.3%とほとんど変化していないことをしめています。したがつて、生活水準は、かわりないように思われるかも知れませんが、戦前では食料費のなかで、米など

の穀類が40%もしめていたのに、戦後ではこれが20%近くに下がっており、その代りに副食の比重が高まっています。なかでも肉乳卵類のような比較的高级食品とされるものが、戦前の5%から現在では20%近くにもなっています。これを数量的にみると、現在では戦前の2倍もの肉乳卵類を食べているわけです。こうしたことは国民の体位の向上や寿命の伸びたことにも関連しているわけで、この面からも戦後の暮らしの向上がうかがえます。

戦前よりも黒字も増加

戦前の昭和10年当時の手取り収入は、前にもふれたように91円31銭でありましたが、この手取り収入のうち生活費として支出された部分は、88.3%となつたのに対して、昭和40年の83.2%よりも、ずつと高くなつております。この割合が小さいということは、逆に家計の黒字となる割合が、戦前の11.7%から現在では16.8%に増えていることになり、それだけ生活にゆとりが平均的には出てきたということになります。もつとも、これは平均のことから個々の世帯で戦後が戦前よりよくなつたとは必ずしもいえません。

昭和10年と昭和40年における手取り収入と生活費

